

孫暁（主編）『標點校勘本 大越史記全書』 （域外漢籍珍本文庫／域外漢籍珍本文庫編纂出版委員會編）、 重慶：西南師範大学出版社；北京：人民出版社、2015年。

蓮田隆志

『大越史記全書』はベトナム前近代史研究における最も基本的な史料の一つである。まず、洪徳28年（1497）に呉仕連が先行する史書をまとめて15世紀初頭までを編纂して『大越史記全書』と名付けた。その後、景治3年（1665）に范公著が主編者となって1662年までを続修し（景治本）、正和18年（1697）に1675年までを黎僖が主編者となって続修した（正和本）。呉仕連本と景治本とは現存しておらず、正和本が現存最古の刊本とされている。また、1676年以降、黎朝滅亡に至るまでの歴史については、いくつかの抄本が残されているが、『大越史記続編』などの書名が与えられており、『大越史記全書』（以下、『全書』と略称する）の続編と位置付けられている。

『全書』の刊本は19世紀の阮朝時代にもマイナーな修正を施した刊本が幾度か刊行されているが、基本的にベトナム国外に流出することのない稀覯書であった。明治17年（1884）に日本の軍人である引田利章が阮朝期の刊本を復刻し（引田本）、これがベトナム国外で通行したが甚だ誤りの多いものであった。そこで、陳荊和氏が戦後に校合プロジェクトを立ち上げ、1984-86年に東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター（現・東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター）から『大越史記続編』部分も含めた3冊本の校合本が出版された。慶応大学による影印本『大南寔録』の刊行と並んで、日本の歴史研究が世界のベトナム史研究に大きく貢献した事業である。

陳荊和本は、その刊行から30年余りが経とうとする現在、日本の古書市場でも稀覯本となり、次世代のベトナム研究者や周辺地域研究者にとって入手が容易でない状況になっている¹。そのような中で、近年、急速にベトナム研究を発展させている中国から新たな校合本が出版された。誠に慶賀すべきことである。本書以外にも、既に『大南一統志』や『大南会典事例』の影印本が中国から近年出版されており、ベトナム史研究でも中国の存在が今後大きくなっていくことが予想される。

本書、『標點校勘本 大越史記全書』は、主編の孫暁氏、副主編の牛軍凱・翟金明両氏以下、総勢15名の編集委員による『全書』および『大越史記続編』の校訂本である。このうち、外

1 東京大学東洋文化研究所附属東洋学研究情報センターによると、現在、上巻が在庫切れとのことである。なお、本書は非売品である。

紀は孫曉（中国社会科学院歴史研究所文化史研究室主任）、本紀の1～4巻は李娜（広西民族大学東南亜語言文化学院副教授）、本紀巻9～11巻は張紅（中山大学図書館古籍部助理館員）、本紀13～19巻は王志強（海南師範大学歴史系副教授）、残りの巻は牛軍凱（中山大学歴史系教授）の各氏が校閲責任者となっている。主編者である孫曉氏の専門は秦漢から南北朝の歴史と経学のように、これまでの主要業績にベトナム史に関するものは見当たらない。李娜氏はベトナム国家大学ハノイ校で博士号を取得しており。中越両国を往来した使者の詩文と文化交流を専門としている。王志強氏は近代における中越文化交流の研究を行っており、牛軍凱氏は近世の中越関係史が専門である。

本書は全4冊から成るが、王朝などの区切りに関係なく各冊それぞれ300ページ前後の均等の厚さになるように分冊されている。目次や書誌情報は第1冊にだけしか付せられておらず、参照にやや不便を感じる。第1冊は、出版説明と凡例、正和本原載の序文類に続いて外紀全書と本紀全書巻5（陳仁宗）までを含む。序文類の順序は正和本そのまま、陳荆和本とは異なっている。また、陳荆和本が収録した引田本の序文類も含まれていない。第2冊は本紀全書巻6から本紀実録巻11（黎宜民）まで、第3冊は本紀実録巻12から本紀統編巻17（黎世宗）までである。第4冊は本紀統編巻18・19および『大越史記統編』で黎末に至る。『大越史記統編』部分は陳荆和本と同様に5巻に分けているが、漢喃研究院蔵A.2089本『大越史記統編』の記載を根拠に昏徳公（永慶帝）紀を巻2から巻3に移している。本書では突っ込んだ議論がされていないが、A.2089本に「本紀統編卷之二十二」とあるということは、巻の区切りについて議論はあろうが、本書で言う「大越史記統編」の巻1・巻2に相当する、『大越史記統編』ではなく「大越史記本紀統編卷之二十一」「同二十二」が存在したことを意味する。つまり、正和本を統修する形での修史が18世紀に存在したことを証明するものだと考えられるのである。これは必然的に、A.2089本系統の修史はA4本・NVH本とは異なる形での修史であったことを意味する²。

出版説明では、『全書』の成立史とこれまでの刊本や校合本、本書作成プロジェクトの説明、『全書』の性格などについて簡にして要を得た説明をしている。但し、ベトナムで既に正和本の影印対訳本が出版されている点に言及が無いのは画竜点睛を缺くと言わざるを得ない。

成立史の部分でまず注目すべきは、黎太祖紀の即位後の部分および黎太宗紀を呉仕連の撰と認め、かつ呉仕連本が黎太祖が死去する1433年までを含むとしていることである。その根拠は示されていないが、太宗紀を呉仕連の撰とする点については、正和本黎太宗紀冒頭の刊記に依拠したのであろう。周知の通り、呉仕連本は先行する2つの史書、つまり黎文休の『大越史記』、潘孚先の『大越史記統編』（『大越史記』『国史編録』とも）を編纂・校訂し、外紀巻1にあたる鴻厯紀と蜀紀を加上したものとされている。その執筆の下限については、潘孚先の『大越史記統編』が「至明人還国」までを記したものであることが、呉仕連の「大越史

2 拙稿「『大越史記本紀統編』研究ノート」『アジア・アフリカ言語文化研究』66、2003。

記外紀全書序」や景治本の序文に記載されている。先行研究は概ねこれに依拠して、呉仕連本は黎太祖が即位した1428年までを記したと考えている³。本書はこれに異を唱えたことになる。しかし、呉仕連による『全書』の序文類を検討しても、外紀を増補したことは明示しているが、本紀を増補したことは記していない。やはり通説通り、呉仕連本は黎太祖の即位まででいったん完結したと考えるべきであろう。

黎貴惇『大越通史』の序⁴は、呉仕連が黎太祖の順天年間から仁宗の延寧年間までを記した『三朝本紀』を撰述したことを記している。太宗紀冒頭の刊記と考え合わせれば、正和本（そしておそらく景治本も）の黎太祖即位以降および太宗紀・仁宗紀は、ファン・ファイ・レーが指摘する如く、呉仕連が『全書』とは別に作成したこの『三朝本紀』を取り込んだものと見て間違いなからう⁵。特に太宗紀冒頭の刊記の存在は、『三朝本紀』をそれほど改変することなく組み込んだ証拠だと考えられる。

本書のうち『全書』部分の底本は、陳荆和本と同じくパリ・アジア協会が所蔵しているポール・ドゥミエヴィル旧蔵の正和本である（脚注では「内閣官本」と称している）。対校に用いたのは、阮朝国子監覆刻本（国子監本）、引田本および陳荆和本である。凡例では西山本も参考にしたとあるが、校勘には用いていないようである。国子監本は複数の版本があることが陳荆和の考証によって明らかにされているにもかかわらず詳細な書誌情報が付されていないため、どの刊本を用いたのか不明なのが惜しまれる。評者がかつて議論したA.4本およびNVH本が基本的に用いられていない点も残念である。質に難のあることがはっきりしている引田本がわざわざ用いられているのは、中国国家図書館に引田本の所蔵が有るからだろうか。引田本の底本が阮朝国子監本はかなり質の悪い本であるらしいことから、正確な校勘本の作成への寄与という点からは積極的意義は見だしにくい。今や引田本を用いる研究者は皆無であろうが、近代の学術史という観点からは、あるいは将来的に意味を持つことになるかもしれない。

校勘について注目すべきは『大越史記続編』の部分である。陳荆和は極東学院旧蔵（現・漢喃研究院所蔵）A.1210本を底本としたが、本書は陳氏が参照できなかった抄本をも参照して校訂を行い、漢喃研究院蔵A.1210本とパリアジア協会蔵HM2198本を底本としている。『大越史記続編』の各種抄本は実に多様であり、陳氏も校合本にて網羅的に異同を記すことを放棄している。かつ、『全書』と較べて書誌学的・学術史的な研究も僅少で立ち後れている。本書がA.2089本に従って巻22を1730年からに改めたことの是非などを検証する必要がある、

3 但し、陳荆和が呉仕連本15巻の構成を「外紀5巻、本紀全書9巻、黎太祖紀1巻」とする論拠とした「擬進大越史記全書表」の注記は、管見の限り引田本にのみ認められるものであり、根拠としてかなり弱い。

4 漢喃研究院蔵A.1389本。南ベトナムで出版された影印対訳本は序を缺いている。

5 Phan Huy Lê. “Đại Việt Sử ký Toàn thư: Tác gia – Văn bản – Tác Phẩm.” VKHKHVN. *Đại Việt Sử Ký Toàn Thư: Bản In Nội Các Quan Bản Mộc Khắc năm Chính Hòa thứ 18 (1697)*. Tập 1, Hà Nội: Nxb KHKH, pp.30-31.

今後の研究を促す意味で本書の果たした意義は大きい。

『全書』の体例について、評者はかつて『資治通鑑』に效つたと書いてしまった。しかし、書名に「史記」を含むことや「擬進大越史記全書表」に「效馬史之編年」とあることから明らかに誤りである。『全書』は体例から見る限り、列伝や志・表などを抜き本紀のみで構成された『史記』スタイルの編年史と考えるべきである。本書は正しく司馬遷の『史記』に效つたとしている。

凡例では本書の形式面での方針が示されているが、横組み繁体字の脚注方式を採用している。本書を含む域外漢籍珍本文庫は概ねこのスタイルを採用している。脚注も繁体字かつ現代中国語では無く古典漢語で記されている（ごく一部簡体字も見られるが、これは誤植・校正ミスに属するものだろう）。縦書きに慣れた人には違和感が残るかもしれないが、日本の研究者にもかなり利便性の高いものに仕上がっていると言えよう。また、人名・官名・地名・書名以外では異体字・俗字を原則として用いないとする。俗字・異体字については注などでかなり丁寧に補足されているように思う。

陳荊和本との大きな違いとしては、陳荊和本にあった西暦の併記と年ごとに付した条文番号を引き継がなかったことが挙げられる。中国史書との齟齬など、絶対年代の付与には問題のある部分があることも確かだが、結果として利便性が大きく損なわれている。一方で、底本上欄に付されている要約は、陳荊和本同様、収録されていない。この点も残念である。

注の付け方から見て、本書は陳荊和本との対校を基本としているようだ。出版説明や凡例にて述べられているように、とりわけ『全書』部分については陳荊和本との異同を記す部分が多い。字句の異同については正和本・引田本・国子監本・陳荊和本の間でかなり綿密な校勘が行われており、陳荊和本氏が独自の判断で正和本の字句をかなり改めていることが分かる。その意味で、陳氏が参照した日本所蔵諸本間の異同については陳荊和本を参照する必要があるので、本書の出版によって陳荊和本が不要になったわけではない。本書はむしろ、陳荊和本の続校訂本と位置付けられるべきもので、文献学的検討を行う場合には、引き続き両書を併用する必要がある。句読点については引田本・陳荊和本と異なる解釈をとるときのみ脚注を付しているようだが、これについてもその当否について今後個別に検討していく必要がある。

中国では21世紀に入って以降、ベトナム前近代史の修士論文・博士論文が増えてきている。本書のような重要且つ基礎的な仕事の刊行が契機となって、今後も中国でのベトナム前近代史研究が引き続き発展していくと予想される。日本の研究者も過去の遺産に胡座をかくことなく、本書をしっかりと検討して、切磋琢磨する関係を築いていきたい。

最後に望蜀の言になってしまうが、電子版の刊行も是非検討してもらいたい。というのも、『大越史記続編』は勿論、『全書』についても漢字から引くことのできる索引が存在しないからである。固有名詞については、ベトナム語訳の索引以外にも漢喃研究院が作成した電子版（底本はA.3/1-4本、『欽定越史通鑑綱目』とセットになったCD-ROM版。影印画像と

ベトナム語訳の対訳形式）を使うことができるが、術語は翻訳されてしまうために上手くいかないことも多い。史料の電子化は世界中の歴史学界で急速に進んでいるが、ベトナム前近代史では画像か翻訳テキストかのどちらかのことが殆どで、原文が電子テキストの形で提供されている史料は絶無に近く、世界標準から大きく立ち後れてしまっていると言わざるを得ない。この点についても電子化が急速に進んでいる中国における中国史研究のノウハウが生かされることを期待したい。